

歩いて楽しい街づくり

建築家 大津 和文

はじめに

都市は、人間の諸活動が様々な形で現され、たえず変化を繰り返している場所であろう。発展(主に経済活動)のエネルギーが強いときは、めまぐるしく変わっていくし、小さくなれば、なんとなく古ぼけた雰囲気を感じるかもしれない。

今、日本の多くの地方都市は、一般的に発展のエネルギーは小さく、さらに、衰退しているニュースを聞くことも多い。

私が生活する八王子は、地方都市ほどではないが、現在は発展のエネルギーは、さほど強くないと多くの市民が感じていることと思う。私は、建築設計のアトリエを開設して、20年以上になる。仕事上で考えたこと、街づくりボランティアをしながら思い感じたことを基に、街づくりの考察をする。

私達がヨーロッパの諸都市を訪れて、その雰囲気の良さ、美しさに感動し、また行きたいと思う気持ちはなんだろう。その多くは、エネルギーがギラギラしている街並みでなく、古くしっとりとした街である。多くは何十年、何百年も大事に使われた建物だし、先の大戦後、もう一度同じように再建した街も多い。

ニューヨークに行ったとき、職業がら昼食も忘れ街を歩いた。行く前はガラスの摩天楼ばかりと思っていたが、実際は違い、街中には教会がいくつもあり、古いスタイルのオフィスビル等が街全体のベースになっていると思えるほど目についた。広場やポケットパーク(小規模な広場)もほどほどの距離にあり、伝統とモダンがバラバラという印象はなく、使いこんでいる街という印象である。同時に訪れた、湖とのコントラストが美しいシカゴ、アップダウンと古い景観様式を持ち海からの夜景が美しいサンフランシスコ、いずれも個性があり、気持ち良いところがちりばめられた印象深い都市である。

現在、世界で最も活気ある都市と言われているロンドンは、最先端のモダン建築が旧市内にも建てられている(写真1)。発展のエネルギーと景観規制との調整を物凄い時間と人手をかけて行い、ビジネスだけでなく、多くの観光客も訪れる魅力的な都市である。

今まで述べた都市の印象は、道を右へ左へと歩いて感じ得たものだ。おそらく車でただ通り過ぎただけであれば、もっと薄い印象になったと思う。やはり街は歩けないといけない。そして市民や訪れた人が「いい街だな、また来たいな」と感じるのはどういう街なのか考えてみたい。私達がその街に抱くイメージの良し悪しは、様々な行動に影響を与えており、決して軽んじてはいけなさと考える。



写真1 「スイス・リー・ビル」
通称“ ガーキン ”(キュウリの漬物の意味)
ロンドン在住建築家 藍谷綱一郎氏撮影

1. 八王子のイメージを構成する資源

アメリカの都市理論家、ケビン・リンチは、著書『都市のイメージ』（1960年、岩波書店）の中で、都市における景観の重要性を述べている。リンチは、すぐれた景観の持つ役割は「人々に潤いを与え、楽しませて、心地よい記憶として残っていく」こととし、大切なことは「見えやすさ」と「解りやすさ」であり、そのことを通じてその都市（場所）のイメージがつくられると述べている。

私達にとって、とても良いイメージがその都市でつくられたとしたら、ずっと良い思い出として記憶に残るし、その都市の名を聞いただけで良いイメージが思い起こされる。そういう都市は、きっと市民にとって住み良い街だと思う。

さて、リンチは都市のイメージを5つの構成要素で整理している。

パス（道路、鉄道などの移動路） エッジ（河川、周辺緑地） ディストリクト（地区、界限） ノード（結節点：駅、広場、交差点） ランドマーク（目印） この5要素を八王子に当てはめて「歩いて楽しい街づくり」の資源を整理したい。なお、ここに掲げる資源が単なる私の個人的印象や考えによるものではないことを確認する意味で、『八王子百景』（1979年、東京新聞ショッパー社、以下「百景」と記す）及び2002年に選定された『八王子八十八景』（以下「八十八景」と記す）を参考にした。

（1）パス（移動路）

ここでは道路のことにとらえるが、やはり甲州街道、西放射線道路が比較的ゆったりと歩ける道かと思われる（写真2）。南浅川沿いの遊歩道も魅力のある道であり、エッジであると思われる。百景では、子安の坂、陸橋があり、八十八景では、桑並木通り（JR八王子駅） みずき通りが他にあげられている。

これらに共通するのは、幅の大小はあっても全てに歩道があり、比較的安全で、周囲の環境やお店の様子を楽しみながら歩けること。良いイメージの街づくりには、安全な歩行者空間の確保が重要であり、さらに街路樹がある道路は、より一層の好印象をもたらしている。



写真2 ゆったりとした歩行者空間がとられた西放射線道路

（2）エッジ（河川・周辺緑地）

エッジとは、いわゆる視覚的に感じる境界線のことであり、浅川が市街地に近く、地区の変わり目を多くの人が意識しているのではないだろうか。中野町から犬目町に連なる丘陵部、子安町から緑町の丘陵部も市街地の縁どりとしての印象をもたらしている。百景では、浅川の支流を含めて自然20景のうち川に関する場所は4カ所挙げられている。八十八景では、市街地の川（浅川、南浅川）で4カ所推薦されている。河川が多い八王子にとって、場所の変わり目であると同時にオープンスペースとして開放感を味わえる空間として印象づけられていると考えられる（写真3）。



写真3 大和田橋より、浅川上流を見る

(3) ディスクリクト(地区・界限)



写真4 保存の会もある中町(古くからの飲食街)の黒堀

郊外の住宅地などでは比較的まとまりをみせているところがあるが、市街地となると、商業地区はここからここまでとか、ここは飲食店が集まっているとか漠然とは解っていても、八王子を初めて訪れる人に説明することが難しいのが八王子ではなかろうか(写真4)。これは、車社会の現代においては、八王子だけではなく多くの都市でも同じ様な状況の都市は決して少なくないと思われる。都市のイメージづくりにとって、あまり街を知らない人でも自分が今どこにいるかが良く解ることが大切であり、良い印象をつくるきっかけになり、楽しい街になる。例えば御徒町のアメ横は、市場的なお店が集まり面白いし楽しい。原宿の表参道は世界のファッションストリートとなり、その周辺の路地もファッション店の集積された地区である。八十八景では、ベルコリーヌ南大沢が地区として唯一選ばれている。

(4) ノード(結節点)

人や物の流れが合流し分散していく場所がノードである。八王子で代表するのは、間違いなくJR八王子駅である。その他の駅もその地域の中核となっている。JR八王子駅もかつてと比べて規模が大きくなり、玄関口としてはふさわしくなっていると思う。さらに改良を加え広場的な広がり、歩道橋のペデストリアン化(建物と建物を結ぶ空中歩行者道)を進めればより良くなり、桑並木ももっと育てば印象に残るノードになるだろう。道路に関しては、八日町、明神町、八幡町、追分等の主要な交差点があるが、景観を含めそれほど強い印象を残すところはない。



写真5 南大沢の中心地区にある輪舞橋

八十八景では、南大沢にある円形歩道橋である輪舞橋が選ばれている(写真5)。その個性的な造形は、やはり印象に残るのだと思う。

(5) ランドマーク(目印)

景観の意識があまりないかたちで街がつくられてきたため、八王子では誰もが認識している目印(パブリックイメージ)は、すぐには見あたらない。百景でみると寺社仏跡や自然の風景、思い出深い街並、建物に個々の地域において、それぞれ心地良い場所、その地を代表する場所として記憶されているのは素晴らしい。しかし、パブリックイメージになっていないと思われる。八十八景でも同じ様なことが言える。馬場喜信著『八王子案内 24 章』(1983 年、かたくら書店)によると、甲州街道は追分までの方向は八王子の最高峰醍醐丸とその背後にある連行峰に向って伸びていることに注目し、好きなランドマークとしている。この分析にパブリックイメージとしてのランドマークを考えるときのヒントになると思える。

今八王子で高尾山がよく見える場所はどこだろう。富士山はどこで見えるだろうか(写真6)。人工的なものがランドマークと言えるには何が必要だろうか。ロンドンには、「ビューコリドー」

(眺望の廊下)という景観規制があり、ロンドンのシンボルであるセントポール寺院が前もって選ばれた8つの地点から見えなければいけない視界が設定されており、高層ビルはこのエリアを避けなければ許可がおりない(写真7)。ロンドンだけではなく魅力的な多くの都市は、この様な努力をしていることを認識したい。



写真6 大和田小学校歩道橋より中心市街地の方向に富士山を見る



写真7 ロンドン セントポール寺院の夕暮
ロンドン在住建築家 藍谷鋼一郎氏撮影

2. 八王子を歩いて楽しい街にするために

具体的な地区を対象として、歩いて楽しい街づくりを提言する。

(1) JR八王子駅周辺を考える

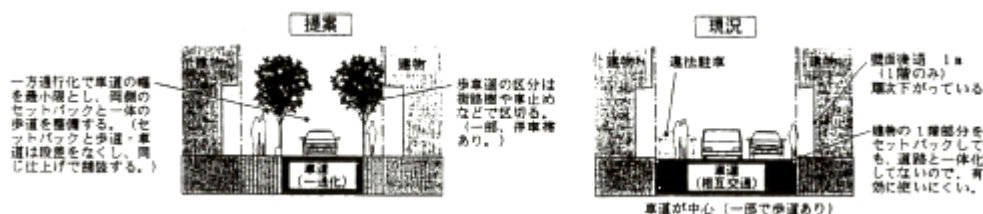
メインの結節点であり、さらに賑わいのある地になって欲しいし、玄関にふさわしいランドマークをつくり上げて欲しい。その観点から考えると、以下の視点、再構成が必要と考える。

(a) 一方通行化で歩いて楽しい地区にする

先に述べたように、安全な歩行空間があることは、街を十分に体感することになり、イメージ形成にとって重要である。その手法は、2002年の八王子ゆめおり市民会議の素案報告書でも述べられているが、一方通行化を前提に歩行者空間を生み出すことに尽きると考える。最近の路上駐車の規制強化では、違法駐車が目に見えて減少した。歩行空間の確保は、商店街の活性化には重要なことだと認識して欲しい。郊外店にはできない街並を感じながら、屋外を歩くことは、喜びであると考え。一方通行化によって、車道は蛇行し、樹木も植えることができ、一時的な駐車可能なスペースもできる(図表1)。八王子市も協議会をつくり検討しており、期待したい。

もちろん、両面通行の時より物の搬入など多少不便になることがあるかもしれないが、人々が快適に買い物ができ楽しめることがより大事なことで、集客力を増すことだと考える。

図表1 一通行によるバリアフリー整備イメージ



出所：八王子市『八王子市基本構想・基本計画素案』2002年9月

(b) 南口再開発ビルはランドマークをつくるチャンスである

八十八景で選ばれている北口の東急スクエアビルも、駅側から見ればその特徴は持っているし、公共施設も最上部に入っていることから、パブリックイメージとしてのランドマークになって欲しい。ただし、駅の反対側から見れば駅ビルばかりが目立ちスクエアビルの存在は薄れる。

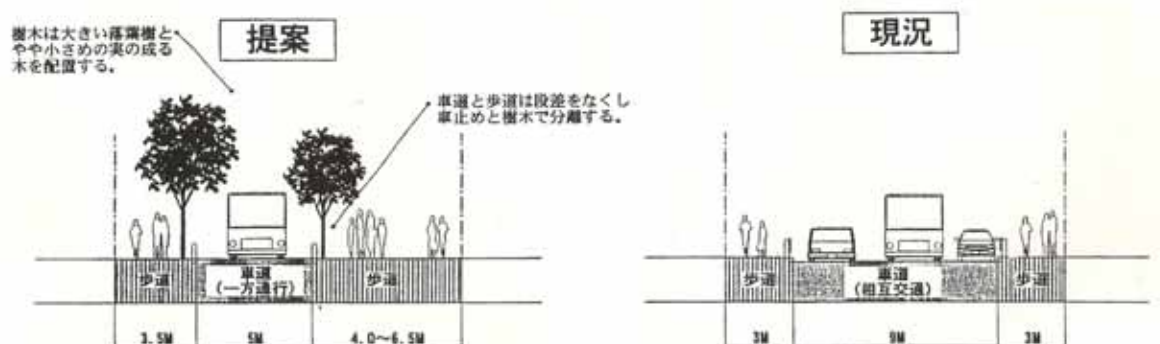
現在、市民会館の移転も含めた、高層ビルを核とした再開発ビルの計画がＪＲ八王子駅の南口にあり、まもなく実施されると聞いている。おそらく八王子市民が多くの場所から見る建物になると想定でき、形態的にはランドマークの資格を持つことになるであろう。ヨーロッパの諸都市では教会がランドマークになっていることが多い。ランドマークになり得るにはその建物の持つ公共性は欠かせないが、南口の再開発には市民会館もあり、一定の公共性はあるが高層部は住居棟と聞いている。もしそうであれば、是非ともかつて、京王八王子駅から見たことができた富士山が見える場を、一部でも公開して欲しい。それでこそ八王子のランドマークとしてふさわしくなるだろう。そして、美しいかたちにして欲しい。毎日見る人に感動を与えて欲しいし、つくる側は責任を持つことを自覚して欲しい。

(c) 東放射線の歩行空間確保整備をさらに進展させる

歩く空間の整備で最も期待したいのは、八王子の顔としての東放射線通りの整備である。一部緊急的に行われてきて良くなっているが、樹木を別の場所に移植してしまった。今の時点の整備であきらめないで、樹木を復活した整備を期待したい。

ゆめおり市民会議の素案報告書に提案されている内容は、一方通行化の手法を使っている。実現可能な方法だと考える（図表２）。

図表２ 東放射線アイロードの検討



出所：八王子市『八王子市基本構想・基本計画素案』2002年9月をもとに筆者が作成

(2) 甲州街道のアーケードを考える

八王子の商業地は、その長さに特徴があると考えられる。明神町から西八王子駅まで甲州街道の両側約3kmが都市計画上の商業地域であり、その容積は主に600%が可能であり、建物の種類によっては10階程度が可能な地域である。近年、マンションが数多く建設されて、商店街と中高層住宅街との共存する姿を見せている。その変化はアーケードの分断となって現れてきており、アーケードの本来の良さである連続した半戸外空間が失われつつある。この分断は徐々に進んでおり、その中途半端な状態は景観には好ましくないと感じられる。

今、大事なことは、残すべき（残したい）街区と全て取り去る街区とをはっきりさせることだ

と考える。そして、残すべきところは今後とも残していくことを前提に再整備し、しっかり美しいデザインのアーケードとして次の世代まで残して欲しいと考える。イタリアのボローニャは世界で一番古い大学があるが、いたるところにアーケードがあり、市民も誇りにしている。このアーケードは実はそれほど計画的ではなく、学生がどんどん増えてしまって上層階にアパートをのせた道路上につくった増築だったのだ。それが今は、世界からこのアーケードを見に観光に訪れる街になっている。夢美術館で鑑賞した後、真っ白なアーケードの下のオープンカフェでゆったりくつろいではどうだろうか。

（３）浅川を考える

浅川は、中心市街地に寄りそうように流れる市街地近接の河川だ。八王子はもっと川のある街だということを意識して街づくりを進めるべきだと考えている。

行政の努力もあって、浅川側の遊歩道兼用自転車道が整備されてきた。広場やその他公共施設と連携し、ベンチを置いたり修景整備をしていくと、もっと魅力的になると考える。浅川に來ると大きな声を出して泣くことができるという文章をどこかで読んだことがある。市街地が緊張する場であれば、浅川は静かで、広々としていて、どこかなつかしい場であって欲しい。「男はつらいよ」の映画で、柴又の門前町と対峙するように江戸川の広々とした映像が出てくると何か明るくなり、ホッとした感じになるのは私だけではないと思う。京都の加茂川のように、生活的にも景観的にもまちづくりに取り込んでいけば、素晴らしく楽しい街になる。

あとがき

街づくりでも、一見、論理的、数量的には説明しにくい世界に、より生活を豊かにし生きている実感を満たしてくれるものがあり、それが人間にとっても重要なことなのだということが、すこしづつ認識されてきた。街を歩く人が増えることによって、その理解は広まると考えている。多くの方と歩いて議論し、それぞれができることをすれば、必ず「楽しい街」ができると確信している。

本年４月のオープンを目指して、八王子市が建設している道の駅「八王子滝山」()は、滝山丘陵の山並に同化した大屋根、谷地川（遊歩道）とウッドデッキ（八王子産）で連続し、親水性をつくり出し、八王子産でつくられた湾曲した板貼の壁は、八王子の農産物を優しく包む室内空間が特徴だが、八王子市のリーダーシップのもとに、官民が何度も議論し、共に勉強し、つくりあげた好例だと思う（写真８）。

市民の参画、協働の作業は、多くの忍耐と寛容性が必要だが、開かれた行政の下、多くの市民が街づくりに関心を示し、少しでも参加・参画していくことが、まちづくり条例ができた現在、市民にとってきわめて重要なことだと考える。



写真８ 工事中の道の駅「八王子滝山」

道の駅「八王子滝山」の施設設計は、八王子を熟知している者の手での想いを共有する市内の建築事務所により設立された協同組合ORK建築設計集団（理事長 岡田公夫）が、無償で行っている。

（おおつ かずふみ）